

た。シーボルト始め、長崎出島に來日したオランダ人軍医のポンペやボードウィン等から、蘭医学を学んだ多くの佐賀の蘭方医らは、最新の蘭医学を佐賀に広めた。また明治初期の医学校「好生館」に、お雇い医学教師として赴任したヨングハンス・スローンは、当初アメリカ医学を講義し、デーニツ・シモンズは、明治新政府が導入したドイツ医学を講義した。佐賀と関係が深い外国人医師も掲載している。

また吉岡弥生（現在の東京女子医大の創立者）、緒方トキ（佐賀県最初の開業試験合格女医）、大橋リュフ（太良町出身女医で、晩年に故郷へ篤志し「大橋記念図書館」と名付けられた）などの先

駆的女医が登場するので、興味は尽きない。

本書は、佐賀県医学史として貴重な文献であるばかりでなく、日本医学史の一端を知る上で不可欠の出版物として、会員諸氏へ推薦したい。

（相良 隆弘）

[佐賀新聞社、〒840-0815 佐賀県佐賀市天神3-2-23, TEL. 0952 (28) 2152, 2017年2月, A5版, 263頁, 1,500円＋税]

※佐賀医学史研究会は、『佐賀医人伝』出版により、学術振興と地域文化の向上に寄与したことで、「平成29年度佐賀新聞文化奨励賞」（学術部門）を受賞しました。

渡部周子 著

『つくられた「少女」——「懲罰」としての病と死——』

本書は「少女」をテーマにした著者の二冊目となる単著である。前著、『〈少女〉像の誕生』（新泉社）は、『少女』に与えられたジェンダー規範の解明が目的であったが、本書では、「良妻賢母」というジェンダー規範が付与される新たな背景を探るとともに、「規範」からの「逸脱」者にとどのような「懲罰」が与えられたのか、その「表象」も明らかにしている。

はじめに本書が使う重要な言葉とその意味を確認しておきたい。まず書名にもある「少女」とは、「女子中等教育の制度化によって出現した、就学期にあって出産可能な身体を持ちつつも、結婚まで猶予された『生殖待機期間』（2頁）にある女子のこと、言い換えると、高等女学校に在籍する女学生である。また「規範」とは、明治期、国や教育界がこの「少女」に求めたジェンダー「規範」のこと、端的に言えば「良妻賢母」の思想だといえる。よって、「懲罰」とは、こうした「規範」の「逸脱」者が被らなければならない「病」の表象である。

以下に全三章からなる本書の目次を挙げ、続いてその概要と若干の感想を付すことにする。

〈目次〉

第一章 つくられた「少女」

第一節 「規範」と「逸脱」

第二節 先行研究と問題の所在

第二章 「規範」像としての「少女」—その源流を辿る

第一節 国の富強と種族の繁殖

第二節 女子教育界における科学思想の受容

第三章 「逸脱」者とはなにか—「懲罰」としての病と死

第一節 「懲罰」としての病

第二節 学校による管理

第三節 潜在的な病者

第四節 女子教育制限説

おわりに

第一章では本書の「問題意識」をまとめる。先行研究や研究方法の説明とともに本書が示す目的とは、「明治期を中心とする近代日本の教育界における、医科学の学説の影響についての考察」（7頁）であった。「明治期にこそ、『女子の心身』をめぐって議論が重ねられ、これを基盤として社会制度」（7頁）がつくられるが、著者は、ダーウィ

ソの進化論やスベンサーのエネルギー保存の法則といった西欧医科学がその成立に強く影響したと捉えている。

第二章は、医科学が種族の繁栄という観点から「女子の心身」をどう捉えたのかをまとめている。著者が注目するのは日本人女性の月経をめぐる言説、明治以降の国際化による内地雑居をめぐる言説、さらに早熟な人種を劣等とみる言説であった。そこで本章の後半は「人種改良」のために「早婚」を戒める言説がいかにして教育界に浸透していか、その経緯をまとめている。

第三章では、本書の核心である「逸脱」者とは何者なのか、さらに教育界はこうした言説を使っていかに男女格差を正当化したかを扱う。

まず第一節では良妻賢母思想からの「逸脱」者に対する「懲罰」の表象をまとめている。「逸脱」者が神経衰弱、精神病、ヒステリーなどの「病」に罹ることが「懲罰」の中身であるが、こうした言説がまことしやかに語られるのも、女子を「産む性」という規範に押し込める近代医科学の学説が大きく貢献していた。第二節は学校における女子の身体管理に焦点を当てた。とりわけ中等教育が力を入れたのが「月経」教育である。学校が女子の生殖や受胎を教える「性」教育をあえて避け、「月経」教育に限定するのは女子の「性的な逸脱」を危険視したからであり、まさに「貞操観念」を規範化するための女子教育であった。さらに第三

節になると、女子を「潜在的な病者」と捉える言説を考察の対象とする。エビデンス不在のこうした言説が、「女子である限り、潜在的な病気の因子」(98頁)をもつといった疑似「学説」に変えられてしまう背景に、ダーウィニズムの強い影響があった。故に女子が自らを美しく彩る化粧でさえ、生存競争を勝ち抜くためのひとつの手段であったと詳述する。

第四節では、第一節から第三節を根拠に女子教育制限説をまとめる。「能力の高い女兒を優秀として歓迎するのではなく、危険視」(156頁)するその言説が学校教育でもしだいに容認され、男女格差を正当化する根拠となる。それが明治という時代の果たした役割であった。

本書は幅広い関心と豊富な資料にもとづいて「少女」をめぐる「規範」や「懲罰」の表象をみごとに浮き彫りにした。評者のように教育学、とりわけその歴史を専門とする者には一読をお薦めしたい。一言付け加えるならば、明治期の教育に強い影響を与えた儒教思想との関連において、西欧医科学が果たした役割はどの範囲までだったのか、その境を探ることを残された課題として挙げておきたい。

(青木 純一)

[日本評論社、〒170-8474 東京都豊島区南大塚
3-12-14, TEL. 03 (3987) 8621, 2017年3月、
四六判、231頁、2,600円+税]